



青年海外協力隊

Japan Overseas Cooperation Volunteers (JOCV)

は何をもたらしたか？

2018年6月

独立行政法人国際協力機構

青年海外協力隊事務局

山本 美香

第 I 部 歴史と制度・組織

- ◆ 協力隊の起源（政治的過程・歴史的発展）についての分析
⇒ 創設の歴史に由来する協力隊の多面的性格。
妥協の産物であるがゆえに持続的発展を遂げた側面。

- 半世紀の時代とともに：変わらぬ理念の下、変化する「日本社会・途上国の課題・参加者の気質等」に柔軟に対応

【事業としての基本理念】

- ✓ 「参加者一人一人が高い志と世界に貢献する気概を持ち、現地の人々と共にある中で信頼を育み、活動を通じて日本と世界を理解する」、この基本理念を共有する人材を派遣する。
- ✓ 時代の変化に柔軟に対応しながら普遍的価値である「平和」の使者として、社会に対し常に新たな視野を提供し続ける。
- ✓ その際、半世紀に亘り培ってきた本事業の価値を広く社会と分ち合う姿勢を基本とする。

◆ ボランティア活動を持続的な成果に導く条件

「隊員活動を補完する現地事務所の役割」

- ① 個々の隊員の活動における目標達成
- ② 生活全般に対する隊員の満足度
- ③ 成果の持続的発展確保

- 評価の枠組み：
 - ◎ 開発への貢献⇒ODA事業
 - ◎ ボランティアの満足度⇒国民参加事業
 - ◎ 相互理解⇒草の根外交の担い手

➤ 事業評価：成果の把握

事業の3つの目的のうち、「開発への貢献」については、更なる定量的評価の導入が求められている。

評価においては、各隊員の活動（評価）の単体ではなく、国／地域別・課題別の面的な成果の把握と発信が重要であり、そのための評価手法の強化やPDCAサイクルの構築が重要。

第Ⅱ部 隊員は何をしたか～開発協力の担い手～

- ◆ 協力隊は、途上国の人々と生活し、直面する問題に取り組む人々に寄り添い、問題解決の新たな方法の創造に寄与する立場にある。

⇒CDの触媒となりうる条件を最も備えている

- ◎協力隊活動と他の協力プログラムとの連携
- ◎協力隊派遣の継続性

➤ 途上国の課題解決への貢献：

（予め想定された技量・経験を前提とした）協力プログラムの一投入として単純には位置付けられない。

一方で、個人差が大きい協力隊の特性を前提としつつも、個々の隊員活動を技術協力や資金協力を連携させていくことは、事業の開発成果の拡充にも繋がる。

➤ 国際的枠組みへの貢献：

SDGsの「誰一人取り残さない」というスローガンに対し、住民と一体となって協力活動を行う協力隊事業の基本理念は合致する。 ⇒隊員活動のSDGsゴールへの貢献

第Ⅲ部 隊員について知る～人材育成の成果～

- 協力隊員の類型化：①好奇心志向、②ビジネス志向、③国際協力志向、④自分探し志向、⑤自己変革志向、⑥慈善志向

⇒ 類型化分析の活用：募集広報活動、グローバル人材の観点での募集・選考・訓練、活動内容・配属先とのマッチング

【協力隊の成果】自己成長する隊員の姿は、帰国後の隊員自身の生き様に映し出されるだけでなく、現地の人々の記憶の中にも成果（思い出）として残される。

- 協力隊活動を通じて養われる能力：

「6つのコンピテンシー」（実践力、主体性・協調性、異文化理解・適応力、発信力・マネジメント力、自己管理能力、語学力）

⇒ 世界を拓く人材【グローバルな視点を持ったフロンティア人材】

- ✓ 国内外の様々な分野で課題解決力を発揮する高いポテンシャル。
⇒ 復興支援や地域活性化の現場で協力隊経験者が活躍。帰国後も地方を元気にする取り組み等に貢献。